北方山草（41）：63-69. March 2024

菅原繁蔵『樺太植物誌』（1975）の植物図について（2）

札幌市　**高橋　英樹**

サハリンの植物名を調べようとして第一に紐解くのは、菅原繁蔵の『樺太植物誌』4巻（菅原 1975a, b, c, d）だろう。本書は戦前に出されたオリジナル版『樺太植物図誌』4巻（菅原 1937b, 1939, 1940a, b）の誤字等を訂正し改題・復刻したもので、現在でも比較的入手しやすいサハリンの植物図鑑である。植物図版については部分図の添付番号を除けばオリジナル版から変更されていない（高橋・東 2021）。

北方山草 39 号に本論と同じタイトル「菅原繁蔵『樺太植物誌』（1975）の植物図について」の小論（高橋 2022）を書いた。そこでは他の植物に誤認したと思われる例を中心にツクバネソウ、オオイヌタデ、マルバネコノメソウ、ナツトウダイ、ミヤマリンドウ、ミヤマナミキ、フタナミソウの７つの植物図を挙げた。それ以外にもいくつか気になる植物図があったのでここでは第 2 報として、同定に疑問が残る例とともに和名ないし学名の解釈が現在と異なる例も含めて紹介する。以下の項目見出しでの和名は現代仮名遣いとしたが学名は菅原（1975a, b, c, d）での綴りのまま記述した。図の説明と本文とで一致しない場合があるが、本文中の学名綴りをそのまま記している。以下の解説文中の学名では正しい綴りとし著者名も現在の標準的な略称とした。

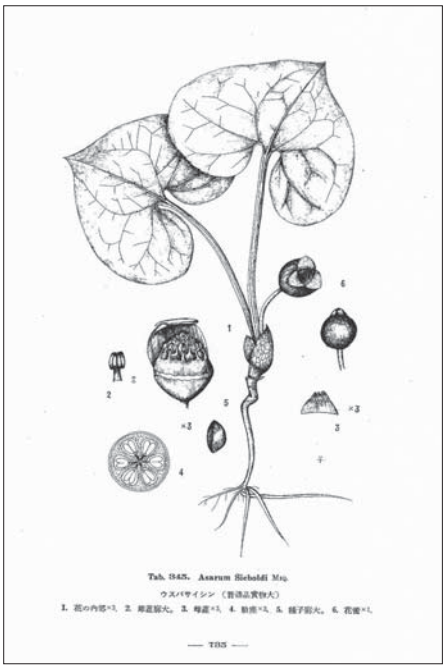

図 1　菅原繁蔵著『樺太植物誌』のウスバサイシン図版

1. Tab. 345. ウスバサイシン *Asarum Sieboldi* Miq.（樺太植物誌第 2 巻 : p. 735-736）

本図（菅原 1975b、図 1）はウスバサイシン *A. sieboldii* Miq. ではなく、類似種オクエゾサイシン *A. heterotropoides* F.Schmidt である。ウスバサイシンであれば萼筒入口がより広く、萼裂片の先が尖りつまんだ（凸頭）ようになる（オクエゾは先が尖るものの鈍頭気味で外側に反り返る）（菅原・東馬 2015）。当時は北海道やサハリンのオクエゾサイシンは、ウスバサイシンとみなされていた（宮部・三宅 1915）ため、菅原もこの見解に従ったのだと思う。菅原（1975b）がこのように扱ったのには時代的な背景もありやむを得なかった面がある。現在ウスバサイシンは中国地方・本州・北